第２回高知市まちづくり活動検討委員会　会議録

**１　日時**　令和２年11月30日（月）19：00から21：00まで

**２　場所**　高知市たかじょう庁舎６階　大会議室

**３　出席者**

　〔委員〕

　　　検討委員会委員６名（欠席者４名）

　〔事務局〕

　　　地域コミュニティ推進課

**４　配布資料**

　（１）式次第

　（２）高知市まちづくり活動検討委員会委員名簿

　（３）前回までの振り返り資料

　（４）答申書草案

　（５）アンケート集約資料

**５　協議事項**

　（１）まちづくりファンド（以下：まちファン）の継続（第３期の実施）について

**【質疑応答，意見】**

①継続について

委員：新しく活動が前へ進むことも期待されるのであと１期はやっていただきたい。今，若い人たちがまちづくりに興味を持って，新しく提案していける人たちが増えてきている。その人たちと団塊世代との思考のギャップを埋めていけるような活動を期待する。

委員：　人材育成の部分でまちファンは大きな役割を担うので，あと１期は続けるべき。

委員：　中山間地域の置かれている状況とファンドの在り方がかけ離れているため，何とも言い難い。

→　　答申書の中の「行政に与えた影響，地域に与えた影響」というところに，中山間地域の課題やどのように位置づけていくかということを入れ込んでいくのはどうか。

【継続していく上での課題等】

委員：　若い世代と高齢者で思考にギャップがある。

委員：　活動をつなげていく世代を育てていかなければならない。

委員：　移住者のことを意識しながらコースを考える必要がある。移住者がまちづくりをする若者と高齢者の空白を埋める層になる可能性がある。

委員：　活動が継続・発展するのが良いという固定概念があるが，若い世代がまちづくりに参加する「きっかけ」としてとらえられれば，単発で終わる活動でも良いのではないか。

委員：　活動を継続するかどうかについても，あまり縛りが多いとファンドの良さがなくなるのではないか。

委員：　まちファンを続ける中で今後のキーワードの一つとして「多様性」がある。「何をもってまちづくりとするか」は変わってきてもいい時期。

　　② 広報の仕方について

委員：　ファンド自体がメジャーでない。ただ紙面に載せるだけでなく，もう少し広報の仕方を工夫するべき。具体的にわかりやすく興味を引くような広報をした方が良い。

委員：　ファンドも３年で卒業なので，広報誌も３年に１回くらい改善してはどうか。卒業団体にも次の回に登場してもらうなど，広報誌を活用していき，それをネット上でも活用してはどうか。

③ 公開審査会について

委員：　まちファンは，一連の助成の流れ（団体同士のかかわりや，その場で発表していた

だくこと）が団体にとってプラスとなり，その後のまちづくり活動につながるのではという思いがあり，今後の福祉関係の団体等から，公開審査会へは出づらいという意見が出た際の対応を考える必要がある。

委員：　審査員が定期的に変わっていくのもだいじなこと。

委員：　「たまごコース」は３万円では少ないと思う。「はじめの一歩コース」も金額を上

げてよいのでは。

④ 行政との関わりについて

委員：　行政との関わりに与えた影響，というか，団体側から見たときに行政と行ったこと

でお互いに良かった事例を書けばよいのかなと。

委員：　行政が施策を組む時の参考にでもなればという望みは持っている。それもひとつの

ファンドの役目と思っている。

委員：　行政に影響を与えた活動というと地域猫がある。行政に影響を与えた活動として今

後も残していく必要がある。

⑤ コース設定について

◆学生まちづくりコース

委員：　同じ金額で「初めの一歩コース」もあるため，存続するべきか検討が必要ではないか。

委員：　ファンドの制度上，旅費や高知市外の活動には助成できないこともあり，ニーズがない。

◆たまごコース

委員：　助成額が３万円では少ないのでは。

　◆はじめの一歩コース

委員：　助成額を最大10万円に変更してはどうか。

→　　全体として，コースの見直しが必要。

⑥ 公益信託について

委員：　補助金（市の直営）となると縛りがでるので，補助金ではない方が良いと思う。

委員：　ファンドの良さは目的を限定しないで何にでも使ってよいというところ。公的価値観があるものを前提として何に対しても使ってよいというところに一番の価値があるため，公益信託を残した方がいい。

　　⑦ 寄付について

委員：　企業にしても個人にしても，寄附をするメリットを明確にする必要があるのではないか。

委員：　活動をやめた団体が残ったお金を寄附してくださった話があったが，同様に活動をやめた後お金が残って困っている団体がいるのではないか。そういった団体に寄付の周知ができれば，お互いに助け合えるのではないか。